桃園市立大溪木藝生態博物館
DAXI WOOD ART ECOMUSEUM,TAOYUAN

大渓の人々の生活と歴史

四連棟展示紹介

本展示では、「大渓の人々」を主人公とし、大渓の歴史が発展していく中における多くの家族や団体、個人のライフストーリーを、さまざまな時代に大渓に移り住んだ人々がこの土地でどのように根を下ろしていったかという物語としてご覧に入れます。

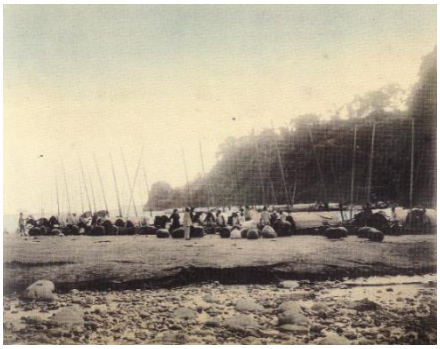
展示は、地理環境や大渓の資源を起点として、大渓の歴史やさまざまな生活の様子をご紹介します。こうした枠組みの下、展示の歴史物語は不定期に入れ替わります。かつて、この土地に生活した大渓の人々、一人ひとりがこの展示の語り部なのです。

展示場所｜四連棟（桃園市大渓区普済路 23 号）
展示時間｜火曜～日曜　09:30～17:00
問い合わせ先｜(03)388-8600
http://wem.tycg.gov.tw/

起源は大漢渓

大渓は、清代には「大姑陷」と呼ばれていました。これは台湾先住民の言葉で「大水」という意味です。山あいにある町大渓は、平地と川が交わるところに位置します。豊かな山林資源に恵まれ、また、町を大漢渓が流れていることで水運の便がよいため、大渓の町は清代から人や物が集まる賑やかな町へと発展しました。

ここでは、水運、製茶、樟脳、林業そして石炭産業の物語を通して、大渓がどのようにして自然や地理的な条件下で産業を発展させ、世界に進出し、世界各国と国際的な貿易を行ってきたかの説明を行います。



大嵙崁埠頭で製茶を積む貨物船
高傳棋氏提供

消えた鉱夫
楊国斌氏提供

大渓の人々－昔と今

大渓には、台湾先住民のケタガラン族とタイヤル族が住んでいました。清朝、日本統治、戦後と時代の移り変わりとともに様々なエスニシティの人々が大渓に根を下ろしました。そうした変遷の軌跡が大渓には残っており、濃縮された台湾への移民史を見ることができます。いろいろな所からやってきた人々は、信仰や血縁を通じて結びつき、時の流れとともに、豊かで素晴らしい生活様式を繰り広げるようになりました。ここでは、大渓に移り住んだ時期に分けて、それぞれの人々の物語をお伝えします。

「六月廿四」遶境（関聖帝君の巡行）
温欣琳氏提供

「四連棟」日本家屋物語

四連棟の日本家屋は、日本統治時代の昭和 12 年から 15 年(1937 年～1940 年)にかけて建てられたもので、丁種判任官の官舎だとされています。戦後も引き続き警察官の官舎として使用されましたが、家族が増え手狭となったため、家の後方に建て増しが行われました。日本時代から変わること無く官舎として使われてきましたが、2012 年に「歴史建築」として登録され、修復が行われた後、大渓木芸生態博物館の「公有館」として使用されています。建物の修復時には、古い建材や以前住んでいた人たちの生活の様子がわかるところが残されているので、探してみてください。何十年もの間の生活の記憶が刻まれているのはどこでしょうか。

周一新氏提供

文化･芸術を育む「町」

大渓はさまざまな人々の努力により、文化や教育が盛んになりました。地元の仕紳階級の人々が公の問題に関心を寄せ、お金や力を出し、教育の発展や近代化のための建設を促進しました。大渓は、画家の呂鉄州、歌手の鳳飛飛等の芸術方面の人才を排出しており、大渓の美と悠久の歴史は画家の眼や、詩人の筆、そして歌手の声を通して、代々受け継がれています。

昭和 12 年(1937)の大渓公学校校門

本館収蔵

鳳飛飛のレコード

本館収蔵

木工芸の継承と協力

木芸は大渓の特徴的な産業で、その名声は遠くまで届いています。ここでは、木芸産業の歴史の発展、製作技術、伝承、そして三大テーマから見た大渓の木製品産業の特色と文化を見ていきます。大渓の木芸産業は、清の時代に林本源家や地方の名望家が豪邸を建てたことに始まると言われています。このとき、中国から呼ばれてきた職人が、大渓の木芸、特に家具製造の技術が伝わり基礎が築かれ、大渓の木芸産業は、1960 年代から 80 年代にかけてピークを迎えました。さまざまな技芸が大勢の人々により分担されて受け継がれ、ともに産業の発展へと導かれたのです。

日本統治時代の森源指物店の仕事の様子
莊森雄氏提供

人々が語る大渓

大きな歴史の流れからは時代の雰囲気や脈絡がわかりますが、歴史の一コマ一コマからは、その土地のことを身近に感じることができます。文献に記載されるようになってからでも、大渓には二百年あまりの歴史があり、そこには、いろいろな文化的な様相が見て取れ、これらは大渓で暮らす人々がともに築き上げてきたものです。大渓の人、一人ひとりが時代の縮図でもあるのです。ここでは、さまざまな大渓の人々の物語を不定期に紹介していきます。ある一人の人生から、異なる分野や時代における大渓の暮らしが見ていただけると思います。

木の博士が語る大渓：李順益

みんなの力で町づくり

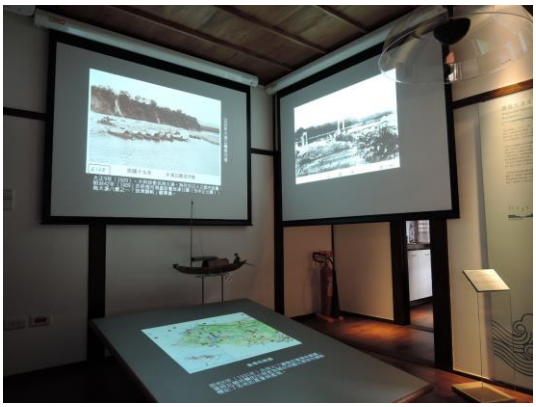
1990 年代の初め、大渓では一連のコミュニティー想像プロジェクトが展開されました。「大渓の宝」が選出され、人々は「識宝（宝を知る）」そして「惜宝（宝を大切にする）」ことを通して、改めて自分の旧宅の牌楼を認識し修復し、通り全体を生まれ変わらせたのです。その後もこうしたイベントが行われ、さまざまな展示や文芸イベントなどの「展宝（宝を展示する）」を通して、大渓の多くの団体により続々と故郷を愛し護る心が伝えられ、熱い思いを持つ人々や青年たちが故郷へ戻り、こうしたイベントに参加するようになり、その活力やエネルギーは今日も続いています。

「大渓の宝」選出イベント

大渓区歴史街坊再造協会提供

協：大渓の協力精神を伝える

異なるルーツをもつ人々、家族、さまざまな職業が共に作り上げた今日の「大渓」。それぞれが皆、大渓文化と姿を作り上げた担い手であり、大渓の最も大事な資産です。日本統治時代を生きた人々が近代化建設を手掛け、戦後は心を一つにして地元の特色ある産業を興し、1990 年代には一丸となって地域おこしに尽力し、大渓の人々が確かな文化的土壌を培って来たことが、大渓木芸生態博物館を誕生させる原動力となりました。大渓の人々の、故郷の対して持つ未来へつながる願い、斬新な試みは、大渓の協力する精神を伝えています。

歷史建築修復工事

2016/10/21　修復工事完成　四連棟展示開幕